

## 史料紹介と研究

京都大学附属図書館所蔵  
『正倉院東大寺宝図』について

稲田 奈津子

京都大学附属図書館の所蔵品中に『正倉院東大寺宝図』（請求番号 81717-2）がある。同館サイトの蔵書検索によりその存在を知り、二〇一九年より調査・撮影の機会をうかがっていたが、このたび画像史料解析センターの正倉院宝物図プロジェクトの活動の一環として調査・撮影が実現した。所蔵館の全面的な協力のもと、二〇二一年九月二十一日に藤原重雄（プロジェクトメンバー）とともに貴重書閲覧室において実物調査を行い、二〇二二年一月に株式会社光楽堂によるデジタル撮影を実施した。今回撮影した資料は【表】のとおりで、『正倉院東大寺宝図』【1】（「」内は表番号、以下同じ）とあわせて同館所蔵の他の正倉院宝物図【2】【3】についても調査・撮影を行った。以下では『正倉院東大寺宝図』を中心に、その概要を紹介していきたい。

\* \* \*

『正倉院東大寺宝図』は、冊子本十三冊、小型図十九枚、卷子本二十巻、大型図八枚より構成されている。

冊子本十三冊【1】は、表紙に宿紙の文書裏を再利用した題箋で「正倉院東大寺宝図」などと題した上で内容別に分類されており、「古文書」が二冊、「衣部」が五冊、「諸具」が二冊、「打物諸図」が四冊となっている。「古文書」【1-1-2】には献物帳や東南院文書、正倉院文書の正集などの模写が収録されているが、東南院文書は第五櫃、正集は第七巻に含まれるものに集中しており、模写当時の整理状況を反映していることが窺える。「衣部」【1-3-1】

には、天平勝宝四年（七五二）四月九日の墨書をもつ大仏開眼会所用の楽舞衣装をはじめ、正倉院に残る衣装類のスケッチ・模写・拓本が雑多に収録されている。端正な図・文字で清書された彩色図と、その原図にあたるラフスケッチとがともに貼り込まれており、衣装各部の寸法や形状・素材が細かく注記されるなど、古代衣装に対する強い関心を窺わせる【表紙】【図1】。「諸具」【1-8-9】は縦綴で、柏木貨一郎（政矩、一八四一―一九八）の手による伊勢神宮の宝物図である。柏木は明治五年（一八七二）の壬申検査以来、蛭川式胤（一八三五―一八二二）とともに正倉院や古社寺の宝物調査に加わっており、この宝物図もそうした関係から、後述のように蛭川の手元に残されたものと推測される。

「打形諸（写）図」【1-10-13】には拓本と、拓本をもとに描かれた実物大の精密なスケッチが多く含まれる。多くは正倉院宝物であるが【図2】、法隆寺金堂の多聞天像・広目天像の光背銘や、法隆寺旧蔵の銅造観音菩薩立像・銅造如来半跏像（東京国立博物館所蔵）の台座銘の拓本もあり【図3】、また長井十足や松浦武四郎所蔵品のスケッチも含んでいる。四カ所に採拓の日時を示す注記があり、「明治八年四月二十三日蛭川写」「明治八年廿九日蛭川写」【1-12】との注記からは、これらが明治八年（一八七五）の宝物調査時に作成された、蛭川式胤の手になる拓本であることが判明する【図4】。他にも「明治八年三月卅一日摺」【1-10】、「明治八年三月卅日摺」【1-12】との注記もあるが【図3】、蛭川とは異なる筆跡で、後述の蛭川の日記からも、別人の採拓であることがわかる。

小型図十九枚【2】は、拓本や模写・スケッチを台紙に貼りこんだもので、第一紙の台紙裏には「正倉院御宝図」「拾九枚ノ内一」と記した宿紙文書を利用した附箋がある。単色・彩色で描かれた衣装図や、衲御礼履・襪・胡祿・花籠・袍などの拓本が含まれる【図5】。

卷子本二十巻【3】は、いずれも宿紙文書を転用した題箋をもつが、外題は記されていない。本来の文書面には「宣旨」等の文字を読み取れる。卷子本の内容は拓本に注記を施したものが主体で、楽舞衣装に関連するものが

六巻 [1-3-1413151819] を占めるが【図6】、他にも種々の正倉院宝物があり、法隆寺宝物 [1-3-3] や「武蔵国比企郡増尾村土中所獲古刀」[1-3-10] など【図7】、正倉院宝物以外も含まれる。冊子本【1】や小型図【2】と重複するものもあるが、装丁の違いは内容の精粗ではなく図の形態にもとづくようで、卷子本には数紙を貼り継いだ長大な拓本類が多く含まれている。

大型図八枚【1-1】は、藤綱・夾綱の屏風模様を彩色で描いたものである【図8】。実物大に丁寧に写しとられており、同じ図柄を持つ複数の扇のうちから原図を特定することが可能である。

本資料群の来歴について、現在所蔵館で確認できるのは「全学和漢書書名目録（目録カード）」の記述のみで、大正三年（一九一四）に若林茂一郎から購入とある。若林茂一郎（一八七七一—一九四四）は京都の書肆で出版も手がけた若林春和堂の三代目代表であり、彼が入手するに至る経緯は未詳である。ただし前述のように拓本の注記や宝物内容から、これらの多くが蜷川による作成、あるいは蜷川が入手・保管したものであることが推測できる。

明治八年（一八七五）四月一日から六月十九日まで、東大寺大仏殿を会場に第一次奈良博覧会が開催され、正倉院宝物や社寺の古器物など多くの文化財が出陳されて盛況を博した。これにあわせて寺内の龍松院では宝物調査が実施されており、博覧会事務局から派遣された蜷川を中心に、菅蒼圃や柏木貨一郎なども参加して、大量の拓本や模写が作成された。宝物調査の経緯については蜷川の日記『八重之残花』に詳しく記されており<sup>②</sup>、また作成された拓本や模写は東京国立博物館所蔵の『正倉院御物図』全七十六巻に集成されている。

日記によれば、三月二十三日より正倉院宝庫の開封が始まり、宝物を取り出して大仏殿に運び入れ、三十日まで陳列作業が進められている。二十八日には博覧会社の拠点を龍松院に移し、四月一日に博覧会が開幕すると、菅と柏木は龍松院において早速調査を開始し、蜷川も九日から加わっている。『正倉院御物図』全七十六巻のうち、所蔵館サイトで公開されている一部画像で確認する限りではあるが、蜷川の署名をもつ拓本は四月十八日から七月

二日までの三十三点に及んでいる。

上述の注記「明治八年四月二十三日蜷川写」[1-12]【図4】は、「鉄鏡」拓本に付されたものであるが、日記五月七日条に「先日來、左物図、上面打ニテ取レ候物ハ不殘取り始メ申候、（中略）鉄鏡箱ニツ、（中略）鉄鏡ハ玉ムシニ焼タリ、鉄色細カニテ、今ノ西洋細工物ノ如ク下ク口懸レリ」とあるものに該当しよう。また「明治八年廿九日蜷川写」[1-13]は金銅杏葉の拓本に付された注記であるが、日記五月十三日条に金銅杏葉のスケッチと観察記録があることから、四月二十九日の採拓ではなからうか。一方で、蜷川とは筆跡の異なる「明治八年三月卅一日摺」[1-10]および「明治八年三月卅一日と三十日は調査に参加せず、三十一日には菅・柏木と連れ立って町々の道具屋を見に行つたとあることから、この三人を除いた別人が採拓したものであることにならう。

本資料と東博『正倉院御物図』とを見比べると、両者に貼り込まれた拓本や模写類が一連の作業工程の中で作成されたことは明らかであり、本来は一体の資料群であると見てよからう。おそらくは『正倉院御物図』を整理した後、蜷川の手元に残った資料群をあらためて整理・装丁したものが本資料なのであろう。

本資料について特筆すべきは、衣装類の拓本・模写・スケッチの占める比重が大きい点である。蜷川は慶応四年（一八六八）に新政府から服制に関する諮問を受けており、制度局取調御用掛を命じられて以降も、これに対する建言書をたびたび提出し、服制考証の著述も残している。蜷川は「本朝風」、すなわち日本古来の服制を主張し、その考証に際しては文献とともに考古遺物や古器旧物を活用している<sup>⑤</sup>。正倉院宝物の調査に際しても、服制への深い関心にもとづき、特に衣装類に注意が払われたようだ。日記五月三十日条にも衣のスケッチとともに「今日切れ類ひの中より此衣を見付、見る処、左衽ニテ実ニ異様也、色椽色ニテ絹也、縫目細カニテ今ノ西洋ヌイノ如シ、何れも珍なりと大さわき、地合細く、思ひの外損シズ、少々つよく存せ

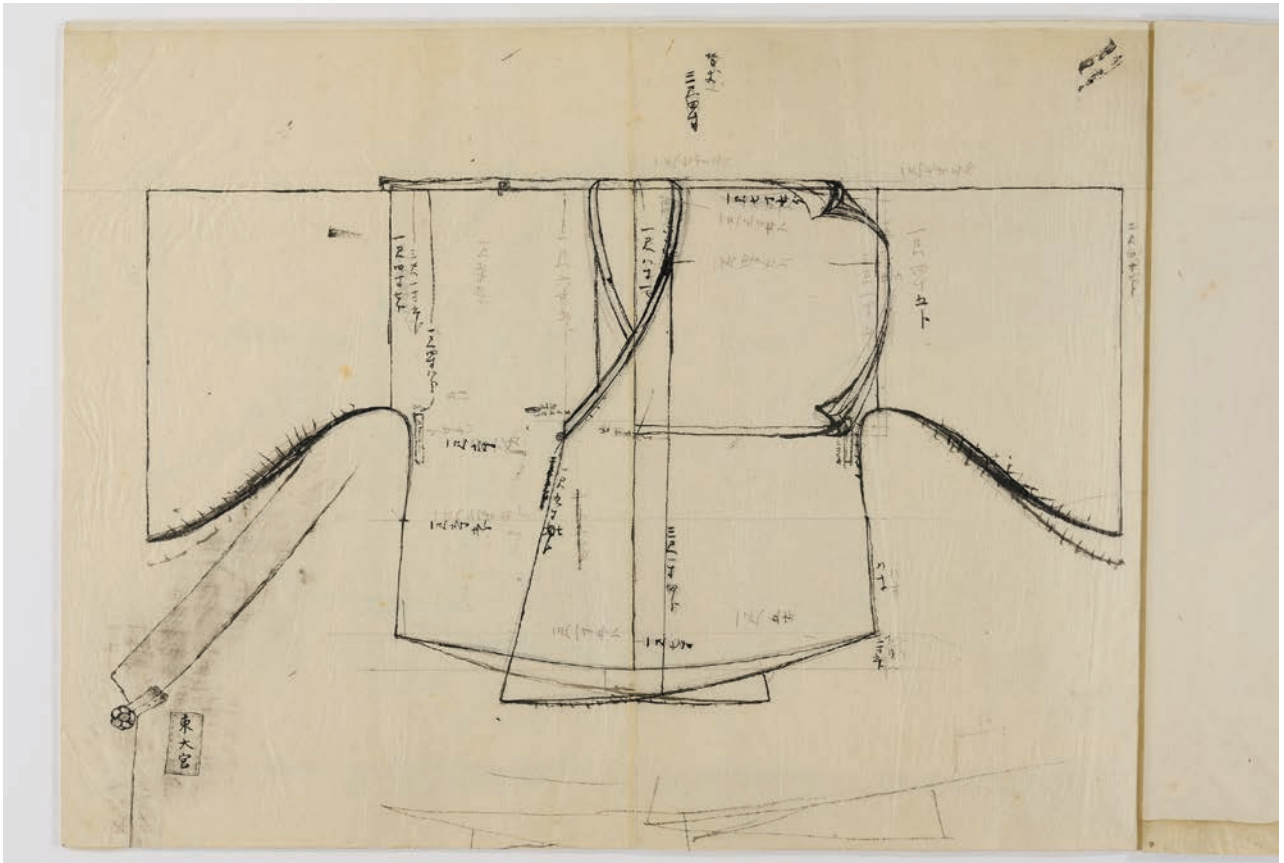


図1 『正倉院東大寺宝図』冊子本 衣部 [1-1-4] (京都大学附属図書館所蔵)

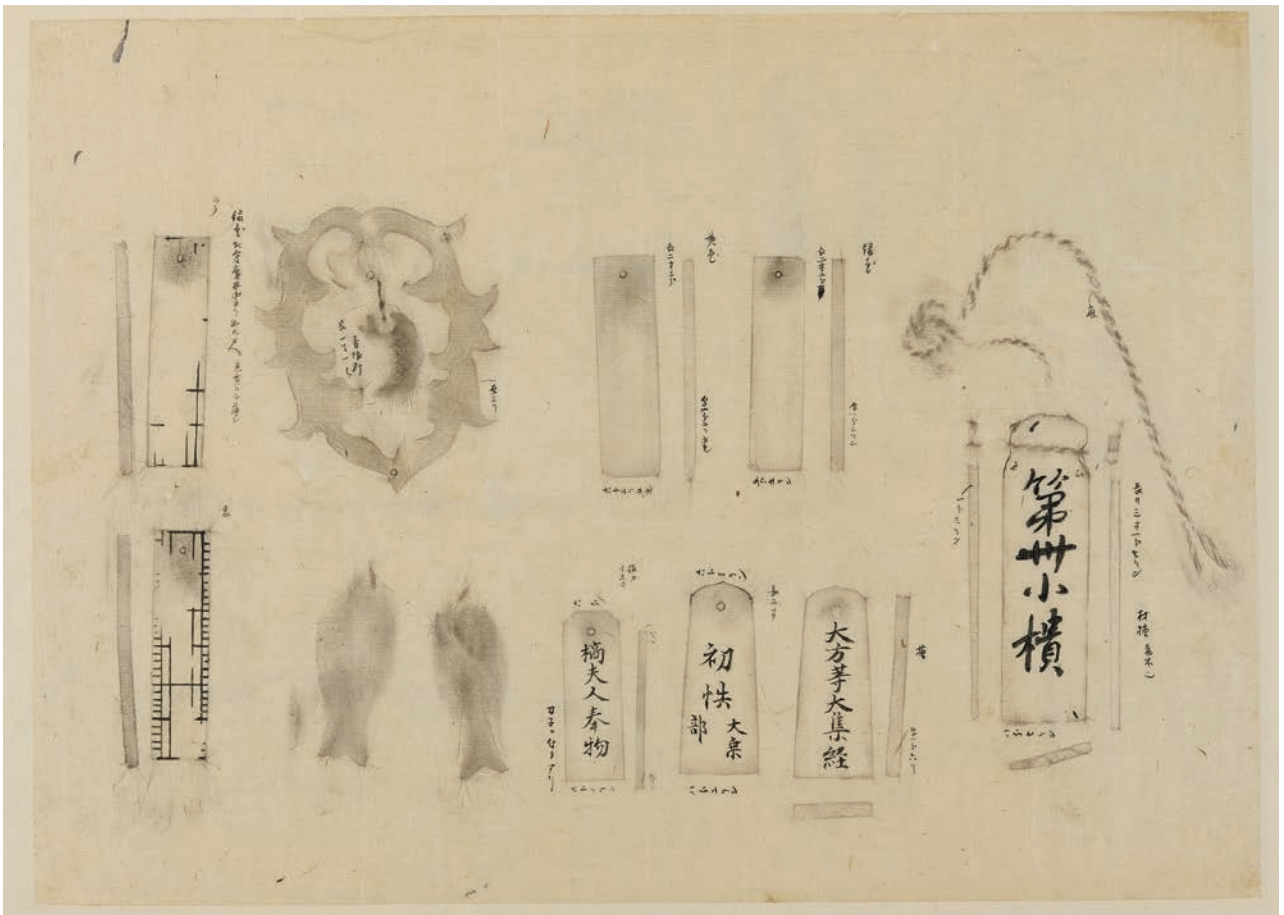


図2 同 冊子本 打形諸図 [1-1-11]



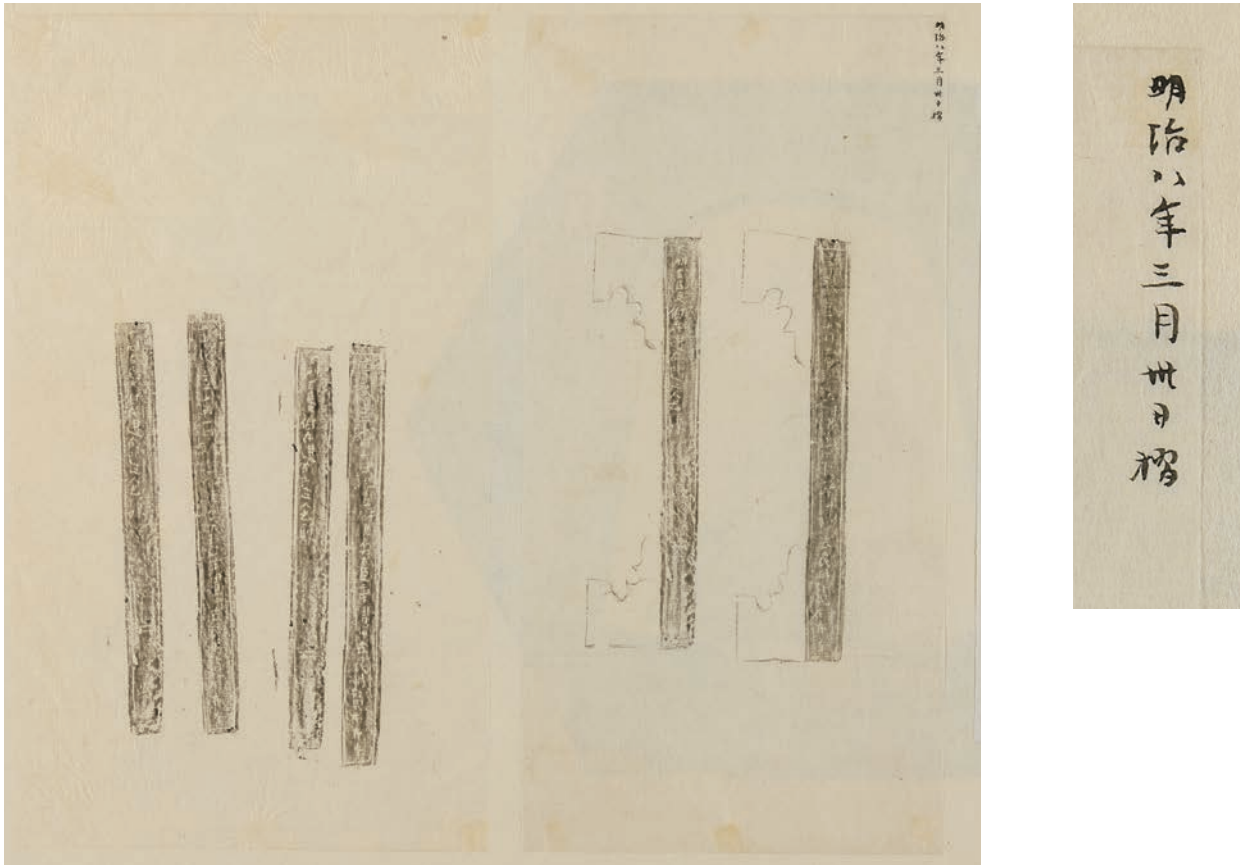


図3 同 冊子本 打形諸図 [1-1-12] 銅造観音菩薩立像台座銘

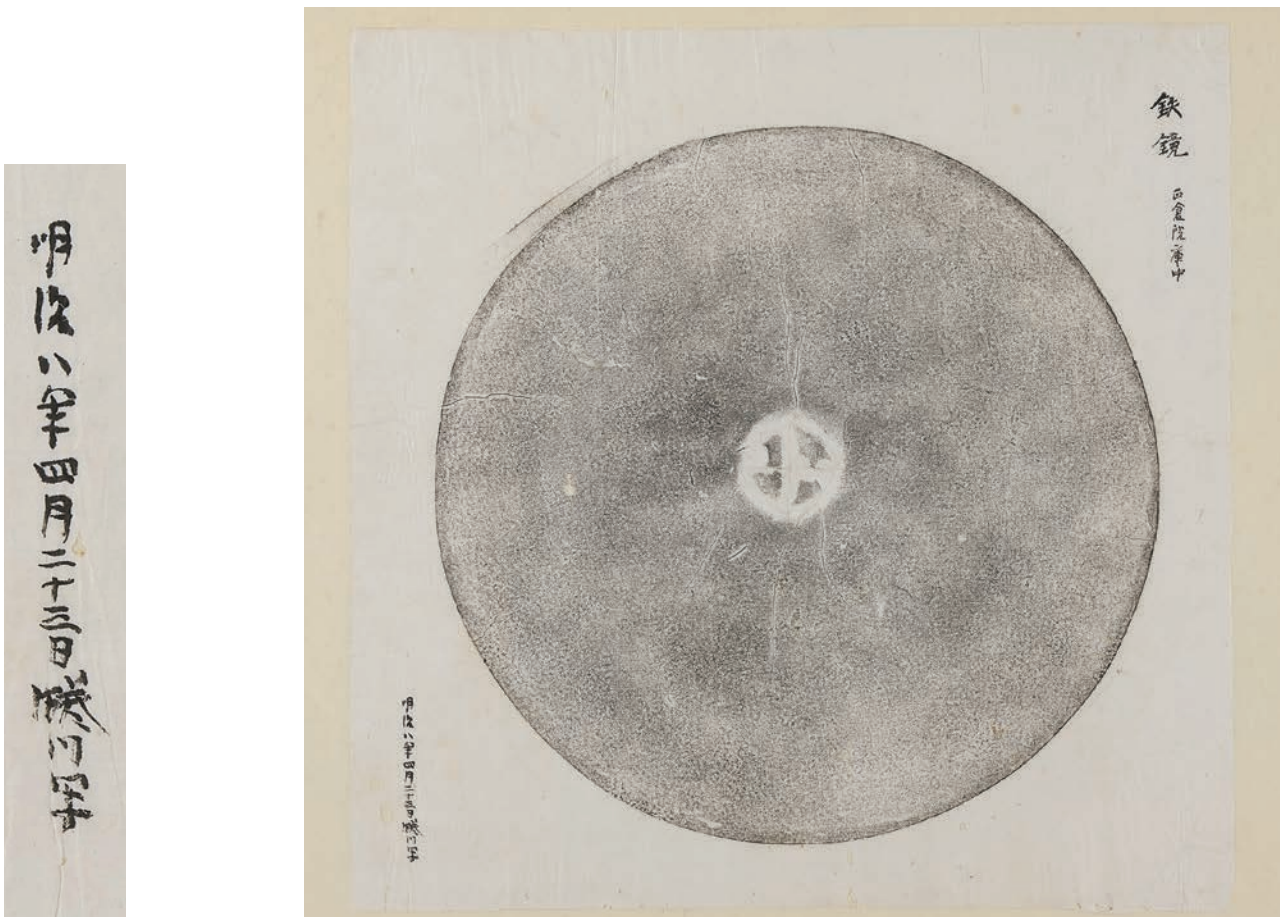


図4 同 冊子本 打形諸図 [1-1-12] 鉄鏡（蜷川式胤注記）

り」とあって、その関心の深さが窺えるが、この衣の模写も冊子本「二」に収録されている【表紙】。日記には古代衣装の模造を製作すべく織物業者らと交渉している様子も見られることから、模写に書き込まれた詳細な寸法類は、模造作成を視野に入れた実用的な意味があったと考えられる。

\* \* \*

『正倉院御宝物(之)図』(請求番号 849/2/1大別) [2] は折本で、黄熟香からはじまる元禄六年図系統の宝物図と、末尾に「御宝物目録」を付す。『全学和漢書書名目録(目録カード)』には明治三十三年(一九〇〇)小室三吉からの寄贈とあり、同氏(二八六三一―一九二〇)は三井物産取締役を務めた実業家である。本書の表紙裏と末尾には「阿波国文庫」の朱印があり、徳島藩蜂須賀家の阿波国文庫の旧蔵であったことがわかる。

『正倉院宝物図(聖武帝御宝库 南都東大寺宝物図)』(請求番号 852/2/2) [3] も折本で、やはり黄熟香からはじまる元禄六年図系統の宝物図と、「御開封役人出仕」「自御倉出御宝物運」「御開封著座図」「御宝物納于御倉行列」の諸図、および末尾に「近代御開符年譜」がある。藤貞幹の『好古小録』『好古日録』、喜多村信節の『嬉遊笑覧』からの抜書を記した附箋五枚が付く。「全学和漢書書名目録(目録カード)」によれば明治四十二年(一九〇九)に金原清左衛門から寄贈されたことがわかり、本書冒頭には「故六止齋 金原安修記念金原清左衛門寄贈」との印も確認できる。

\* \* \*

以上、『正倉院東大寺宝物図』を中心に紹介してきた。本資料は明治八年の宝物調査の際に作成された拓本・模写類のうち、『正倉院御物図』全七十六巻(東京国立博物館所蔵)に集成されず蝮川式胤の手元に残ったものを中心に、各々の体裁によって整理・装丁されたものと推測される。蝮川の古代衣装への強い関心を反映し、衣装類の資料を多く含む点が特徴である。蝮川所蔵資料については、歿後五十周年を記念した展覧会に際してまとめられた展

観目録が有用であるが、本資料は大正三年には現蔵館の所蔵に帰しているため、上記目録には含まれていない。新たな蝮川関係資料の出現という点でも、貴重な資料群と言えよう。

今回撮影した画像は、史料編纂所図書閲覧室にて公開している。史料編纂所ホームページのデータベース選択画面 (<https://www.ap.h.u-tokyo.ac.jp/ships/>) の「Hi-CAR Plus」を選択し、「京都大学附属図書館所蔵正倉院宝物図関係史料」で検索してみたい。また来春には京都大学附属図書館サイトからインターネット公開が予定されており、精細なデジタル画像を活用した研究の進展を期待したい。

#### 註

- (1) 大久保久雄監修『帝国日本の書籍商史―人物・組織・歴史』第三卷(金沢文圃閣、二〇一七年)所収の新聞社出版部編『出版人名鑑』(精華書房、一九三二年)、京都書肆変遷史編集委員会編『出版文化の源流 京都書肆変遷史』(京都府書店商業組合、一九九四年)。
- (2) 米田雄介編『蝮川式胤「八重の残花」』(中央公論美術出版、二〇一八年)。
- (3) 註2『蝮川式胤「八重の残花」』、四三頁。
- (4) 註2『蝮川式胤「八重の残花」』、五三頁。
- (5) 米崎清美「解題」『蝮川式胤「奈良の筋道」』中央公論美術出版、二〇〇五年)。
- (6) 註2『蝮川式胤「八重の残花」』、九六―九七頁。
- (7) 註2『蝮川式胤「八重の残花」』、五月十五日条(五九頁)、二十六日条(九三頁)等。
- (8) 蝮川第一編『蝮川式胤追慕録』(五段田園、一九三三年)。

これまでの正倉院宝物図プロジェクトによる調査研究の成果は、左記の展覧会でも反映される予定です。

国立歴史民俗博物館 企画展示

「いにしえが、好きっ! 近世好古図録の文化誌」

二〇二三年三月七日(火)～五月七日(日)

表

番号	史料名	外題 ※ ( ) は内容説明	コマ数 (コマ番号)	縦×横 (cm)
1-1-1	正倉院東大寺宝図 (冊子) (1)	正倉東大宝図 古文書 十七枚	21 (001~)	35.5×49
-2	正倉院東大寺宝図 (冊子) (2)	正倉東大宝図 古文書 廿二枚	26 (022~)	35.5×49
-3	正倉院東大寺宝図 (冊子) (3)	正倉東大御宝之図 衣部 十二枚	16 (048~)	35.5×49
-4	正倉院東大寺宝図 (冊子) (4)	正倉東大宝図 衣部 十四枚	18 (064~)	35.5×49
-5	正倉院東大寺宝図 (冊子) (5)	東大寺宝図 衣部 十二枚	16 (082~)	35.5×49
-6	正倉院東大寺宝図 (冊子) (6)	正倉東大宝図 衣部 十五枚	19 (098~)	35.5×49
-7	正倉院東大寺宝図 (冊子) (7)	正倉東大宝図 衣部 廿二枚	25 (117~)	35.5×49
-8	正倉院東大寺宝図 (冊子) (8)	正倉東大宝図 諸具 三十三枚	36 (142~)	49×35.5
-9	正倉院東大寺宝図 (冊子) (9)	正倉東大宝図 諸具 四十一枚	44 (178~)	49×35.5
-10	正倉院東大寺宝図 (冊子) (10)	正倉東大宝図 打形諸図 十七枚	21 (222~)	35.5×49
-11	正倉院東大寺宝図 (冊子) (11)	正倉院東大寺御宝図 打形諸図 十三枚	17 (243~)	35.5×49
-12	正倉院東大寺宝図 (冊子) (12)	正倉東大宝図 打形諸図 廿一枚	25 (260~)	35.5×49
-13	正倉院東大寺宝図 (冊子) (13)	正倉東大宝図 打形写図 廿四枚	27 (285~)	35.5×49
1-2	正倉院東大寺宝図 19枚	正倉院御宝図 拾九枚	39 (312~)	49×67
1-3-1	正倉院東大寺宝図 (卷子) (1)	(衣装 [接腰])	11 (351~)	43×380
-2	正倉院東大寺宝図 (卷子) (2)	(櫃)	9 (362~)	39×320
-3	正倉院東大寺宝図 (卷子) (3)	(法隆寺宝物)	12 (371~)	42×520
-4	正倉院東大寺宝図 (卷子) (4)	(衣装 [袍・衫])	16 (383~)	37×700
-5	正倉院東大寺宝図 (卷子) (5)	(刀子・剪子・匙・玉帯)	13 (399~)	27×480
-6	正倉院東大寺宝図 (卷子) (6)	(往来・鑰匙ほか)	7 (412~)	42×240
-7	正倉院東大寺宝図 (卷子) (7)	(最勝王経帙)	7 (419~)	37×220
-8	正倉院東大寺宝図 (卷子) (8)	(檜和琴残欠)	15 (426~)	38×670
-9	正倉院東大寺宝図 (卷子) (9)	(杖刀・墨絵弾弓・太刀・双六局ほか)	10 (441~)	42×420
-10	正倉院東大寺宝図 (卷子) (10)	(大刀・横刀・武蔵国土中所獲古刀ほか)	9 (451~)	38×314
-11	正倉院東大寺宝図 (卷子) (11)	(檜和琴)	6 (460~)	37×215
-12	正倉院東大寺宝図 (卷子) (12)	(阮咸)	7 (466~)	38×250
-13	正倉院東大寺宝図 (卷子) (13)	(衣装 [襪])	9 (473~)	42×380
-14	正倉院東大寺宝図 (卷子) (14)	(新羅琴)	18 (482~)	39×810
-15	正倉院東大寺宝図 (卷子) (15)	(衣装 [衫カ])	6 (500~)	39×220
-16	正倉院東大寺宝図 (卷子) (16)	(几)	13 (506~)	42×565
-17	正倉院東大寺宝図 (卷子) (17)	(箭)	8 (519~)	42.5×295
-18	正倉院東大寺宝図 (卷子) (18)	(衣装 [脛裳])	7 (527~)	39×260
-19	正倉院東大寺宝図 (卷子) (19)	(衣装 [衫])	12 (534~)	37.5×476
-20	正倉院東大寺宝図 (卷子) (20)	(玉帯)	9 (546~)	37×369
1-4-1	正倉院東大寺宝図 (大型図) (1)	(北倉44藤纏屏風 [鸚鳥武屏風])	2 (555~)	160×58
-2	正倉院東大寺宝図 (大型図) (2)	(北倉44藤纏屏風 [象木屏風])	2 (557~)	161×54
-3	正倉院東大寺宝図 (大型図) (3)	(北倉44鳥木石夾纏屏風 [第1扇])	2 (559~)	148×59
-4	正倉院東大寺宝図 (大型図) (4)	(北倉44鳥草夾纏屏風 [第2扇])	2 (561~)	159×53
-5	正倉院東大寺宝図 (大型図) (5)	(北倉44藤纏屏風 [羊木屏風])	2 (563~)	146×60
-6	正倉院東大寺宝図 (大型図) (6)	(北倉44古人鳥夾纏屏風)	2 (565~)	145.5×54
-7	正倉院東大寺宝図 (大型図) (7)	(北倉44麟鹿草木夾纏屏風)	2 (567~)	121.5×59.5
-8	正倉院東大寺宝図 (大型図) (8)	(北倉44藤纏屏風 [熊鷹屏風])	2 (569~)	134.5×58
2	正倉院御宝物 (之) 図	宝物之図 / 正倉院御宝物之図	32 (571~)	40×24
3	正倉院宝物図 (聖武帝御宝庫 南都東大寺宝物図)	正倉院宝物図 全 / 聖武帝御宝庫 南都東大寺宝物図 全	36 (603~)	27×20



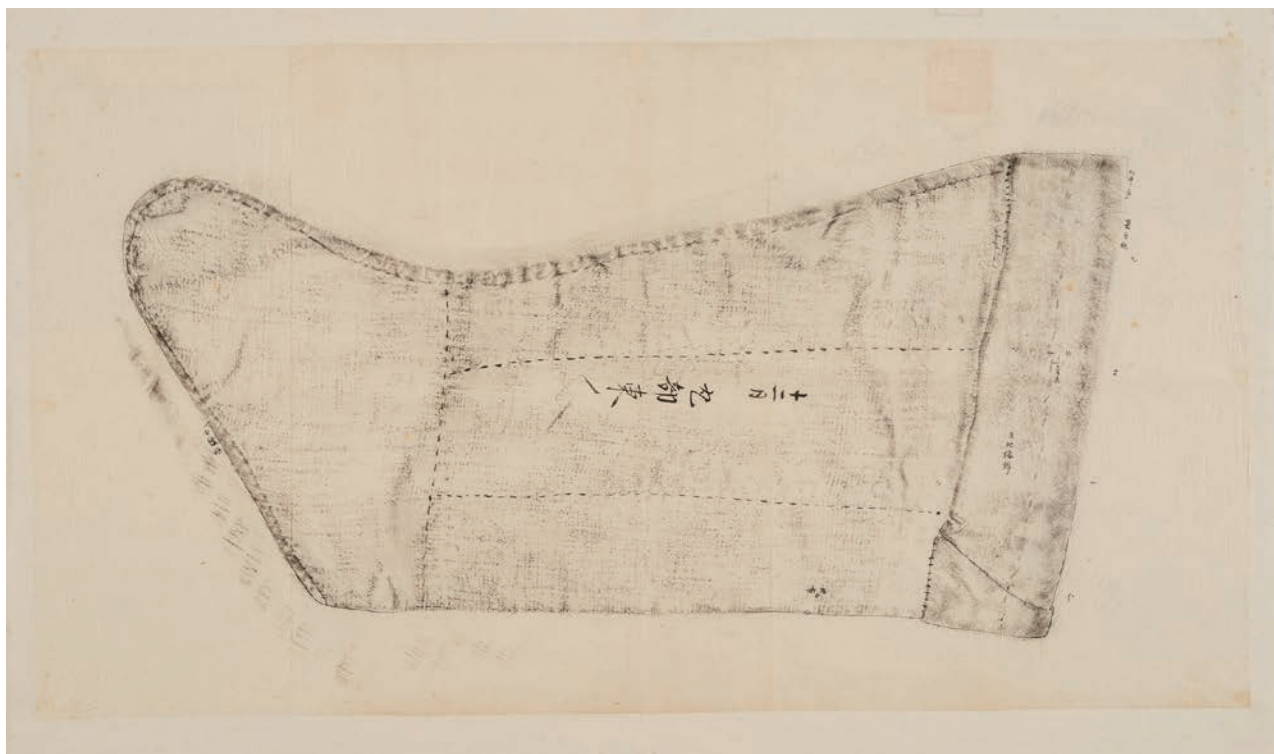


図5 『正倉院東大寺宝図』小型図 [1-2] 襪 (京都大学附属図書館所蔵)

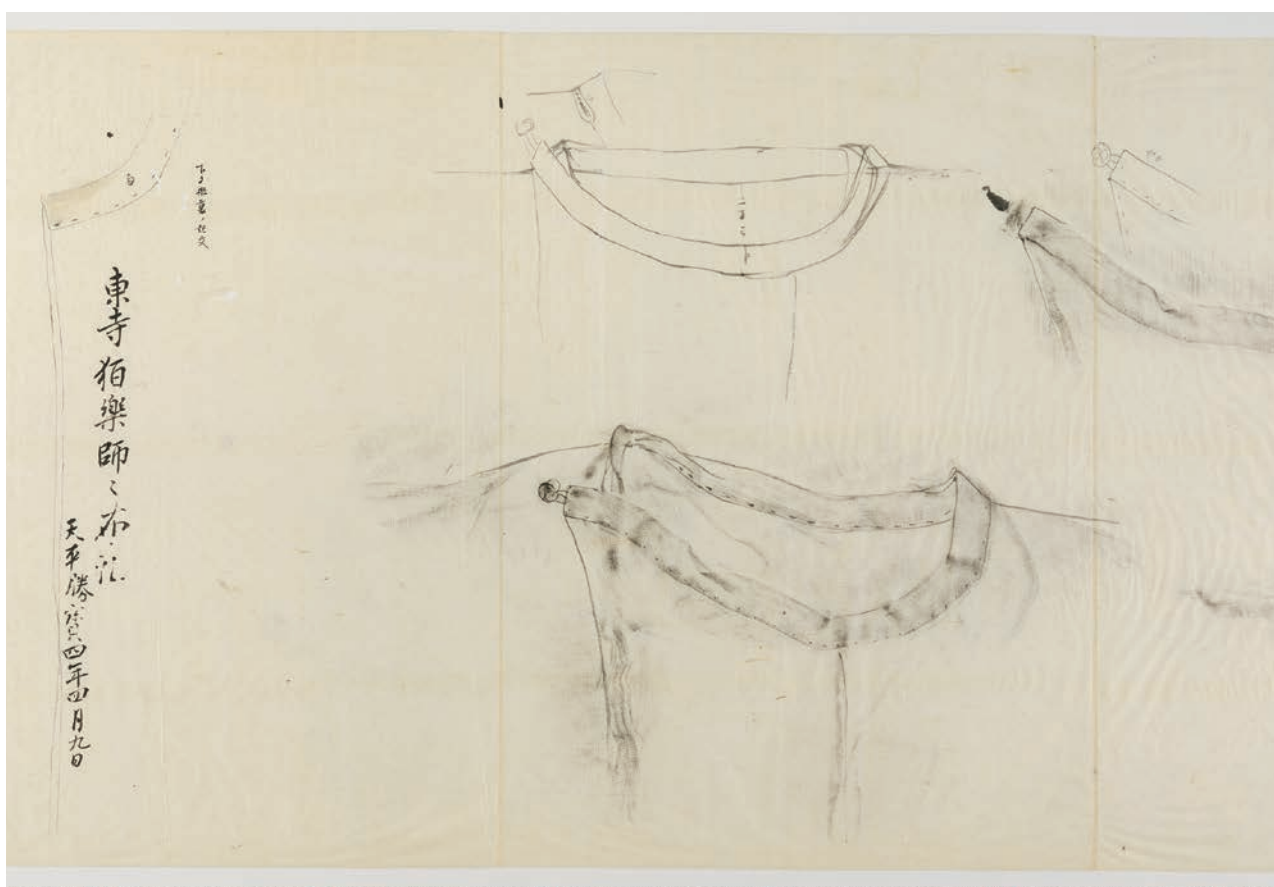


図6 同 卷子本 [1-3-19] 狛樂師子布衫



図8 同 大型図 [1-44] 鳥草夾纈屏風〔第2扇〕

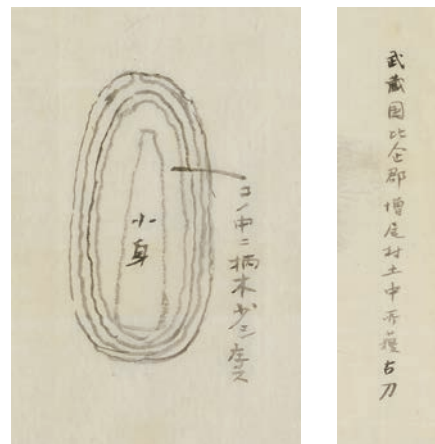


図7 同 卷子本 [1-3-10] 武蔵国土中所獲古刀